

『米欧回覧実記』の女性たち

しお かわ ひろ こ
塩 川 浩 子

『米欧回覧実記』（1878）は、国書奉呈、条約改正予備交渉と制度・文物の調査のために欧米12か国へ派遣された岩倉具視米欧回覧使節（1871-73）の公式記録である。記録の公刊は国民を啓蒙し、政府の信頼を深めるというフルベッキの建言に基づき、記録担当専従の久米邦武が起用されることになった。公式記録公刊の建言には記録すべき49項目が掲げられたが、それには男女交際、教育、学校、公私の饗宴、議院および裁判所など女性論に発展する可能性のある題材も含まれていた。他方、岩倉使節には、津田梅子、山川捨松など10年の予定で派遣される開拓使女子留学生が、アメリカまで同行した。西部開拓で活躍するアメリカ女性のように、日本の女性も北海道開拓で働いてほしいという期待がこめられていた。

『米欧回覧実記』の久米邦武は、日本を導く西洋の自由な価値を理解しようと努め、様々な西洋の驚異を簡明な文章で冷静に客観的に表現し、読者に未知の世界を見せてくれる。学校訪問、裁判所見学、饗宴などの記録は読者を女子教育や男女の社会的関係の考察へと誘う。本論では、『米欧回覧実記』における久米の、女性たちに関する論評を読み解きたい。

1. 学ぶ少女、働く女性

(1) 学ぶ少女

スウェーデンに行った岩倉使節団は1873（明治6）年4月29日、ストックホルムの有名な小学校を訪れた。卒業後は家業に就く、5-6歳から14-15歳の約1万人の生徒に「普通の学科」を教える大規模校だ。男女の教員がおり、新人教員1名が担当する生徒は25名だが、慣れると45名から50-60名の生徒を担当するという。生徒は隊列を組んで着席すること、男女とも銃をじっさいに持たされて扱い方を教わることが特記されている。

久米は、ここで一般的な西洋の小学校の授業について

皆平易浅近の教にて、男女貴賤をとはず、苟も生命を保続し、人生の快樂をうくるには、一も知らざるに付し難き科のみを教ゆるのみ⁽¹⁾（第69巻、四-191）

と解説し、授業科目として、まず語学、文典学、画学、数学、国史、地理、普通窮理、唱歌の8科目を挙げ、運動と修身の2科目を追加している。「修身」のために、外部から聖職者を招く例

が見られたが、減少傾向という。唱歌、体育、修身を含め、欧米の小学校教育に男女の区別は認められない、と久米はみる。

岩倉使節団は1873（明治6）年6月19日、最後の訪問国となったスイスのチューリッヒに到着し、翌20日に学校見学をする。チューリッヒの学制は、スイス全土の学制と考えて良いという。久米は小学校で教える科目として10科目を列挙する。前記スウェーデンの小学校の10科目のうち「地理」と「歴史」の2科目を合体させて「地理・歴史」1科目とし、最後に、わざわざ女生徒のための科目「女工」を加えている。「女工」とは繻い物から服の新調までを含む裁縫であり、地味で速い仕事が要求され、小学校の内または外に、学区ごとに一か所の女工所が設置されるとある。スイスでは、初等校の卒業後、希望者は高等小学に進学すると説明されているが、女生徒は女工学校に入るようだ。女性が小学校卒業後も勉強を続けるということは、裁縫に精進することなのか。高等小学校の教科は「仏語、測量、実験、地理、歴史、瑞西の政体、農工商に関する物理、武技演習の科に及ぶ」（第84巻、五-67）というのに。

1873（明治6）年1月25日、パリの岩倉使節団は盲学校 L'Institution Ntionale des Jeunes Aveugles を訪れる。この盲学校は宗教教育を含む国語教育、敏感な聴覚と手先の器用さを生かした男女別職業訓練（女生徒には、宗教活動を視野に入れ、唱歌の訓練も行う）、算数を含む生活技能訓練そして社会性の訓練を行うという。久米は活発な男子200名余りの授業を見学し、点字の写本を作成する作業の速さに感嘆しながらも、フランス製点字器の精巧さよりアメリカ製点字器の簡便さを高く評価する。

さて100名余りの女生徒は女性教員が指導する。授業科目は国語、算数、唱歌が主だが職業訓練もあり、卒業後の社会活動として被服関係の手仕事、タイピストおよび教会の音楽担当などの仕事が想定され、自活を目指すことが重ねて報告される。卒業後、男性は結婚して一家を成すのに女性が弱気である、と教員は焦燥感を抱いているようだ。女生徒たちの弱気は本人だけの責任とは言えないだろうに、久米の論評はない。男子生徒の伴奏で女子生徒が歌ったこの日の音楽会はすばらしかった、という一文に読者は安堵する（第48巻、三-156～157）。このように、目の不自由な女生徒たちに、裁縫以外の、それぞれの個性に応じた道も模索されていることを喜びたい。

（2）小学校教員の給料

1872年1月15日（明治4年12月6日）、岩倉使節団は最初の訪問国アメリカ合衆国のサンフランシスコに到着した。1月23日（明治4年12月14日）、岩倉大使を含めた一行のうち17名がデ・ロング公使とブルックス領事に伴われて、1864年に創立された女子校のデンマン小学校 Denman Grammar School⁽²⁾ を訪問し、ジェームズ・デンマン校長に迎えられた。教師のピアノ伴奏で上級生たちが斉唱した唱歌に一同、感銘を受けた後、市内最大の男子校リンカーン小学校

に向かい、マークス校長と数人の女性教員に迎え入れられた。

この報告で注目したいのは、リンカーン小学校教員の給料である。全教員 21 名のうち男性教頭の月給は 175 ドル、もう一人の男性教員は 125 ドルである。他の 19 名の女性教員のうち新人は 50 ドル、しかし毎年 5 ドルから 10 ドル昇給し、83 ドルの女性教員もいる。ときには 100 ドルに至ることもあるという（第 3 巻、一-89）。女性教員が、その男性教員並の 125 ドルに至ったことはないということか。男女の給料格差が大きいことに驚かされる。男女の給料格差の原因は性別によるのではなく、職歴と能力によるのだろうか。初任給 50 ドルから出発して 83 ドルに到達するのに必要な歳月は、年 5 ドルの昇給で 6 年半、年 10 ドルの昇給で 3 年強である。19 名の女性教員の勤務年数は、最長で 6 年半ということか。いや、1872 年のサンフランシスコの小学校に、勤続 3 年以上の女性教員がいる、と称えるべきか。

なお 1872 年のアメリカ合衆国に存在する大小学校は 141,629 校、教員は 221,402 名（内男性 93,329 名、女性 127,713 名）⁽³⁾、生徒は 7,209,938 名（内男性 3,621,996 人、女性 3,587,942 名）、またフィラデルフィアに存在する学校は 380 余校、男性教員は 8,000 余名、女性教員は 1,190 余名、生徒 74,400 名という記述もある（第 18 巻、一-321～322）。またフランスの女子学校の教員の 3 分の 2 は修道女という報告もある（第 41 巻、三-36）。

欧米で教員が女性の職業として確立していることを久米は確認し、このように煩瑣を厭わず報告した。なお、ほぼ 140 年後の 2013 年、経済協力開発機構が 34 の国と地域を対象に中学校レベルの教員の勤務環境を調査した「国際教員指導環境調査」によると、女性教員の割合はフランス 66.0%、アメリカ合衆国 64.4%、イギリス 63.2%で、日本だけが半分以下の 39.0%である。

(3) 病院などで働く女性たち

1873（明治 6）年 1 月 18 日、フランスの岩倉使節団はバリの陸軍病院を訪問する。看護婦は修道女が多いが男性看護師もいる、と久米は報告する（第 45 巻、三-118）。

同年 3 月 14 日、プロシアの岩倉使節団はベルリン貴族病院を見学する。洗濯室に洗濯機はなく、5-6 名の女工が手作業で洗濯していたという。病院には上流階級の未亡人など大勢の働く女性があり、この日、病院内を案内してくれたのも、40 歳過ぎの雅な女性だったという（第 58 巻、三-324）。

1872 年 10 月 5 日（明治 5 年 9 月 3 日）、イギリスの岩倉使節団は、マンチェスターの刑務所を見学する。女子刑務所の看守は女性で、そのうちの一人は勤続 33 年、60 歳を超えているようだ、と報告されている（第 28 巻、二-168）。

『米欧回覧実記』の久米が国策を視野に入れ、一般女性の活用と自活する女性個人としてのキャリア教育について、最低限の配慮をしたことは評価したい。

2. フランスの夫殺害事件から夫婦について考える

1873（明治6）年1月22日、パリの岩倉使節団は高等裁判所を訪問し、フランス人の夫を殺害したイギリス人妻の裁判を見学する。久米は

此婦人は英国の生まれにて、仏人の妻となれるものなり、欧州にて夫を弑逆せる婦人は、其原因多くは夫の財産を貪り、之を殺してその遺金を占領し、而して後に他に嫁するの欲情より出る、日本の姦淫より原すると、其情を異にす（第47巻、三-142～143）

と書く。

いま夫殺害事件があれば、まずDV（家庭内暴力）の有無を確認するだろう。2011年のフランスでは24名の男性がパートナーに殺害されたが、このうち半数の12名はDVの加害者だった⁽⁴⁾。「其原因多くは夫の財産を貪り…」と久米は書いたが、その後ろにDVが隠されていないか。また「日本の姦淫より原すると、其情を異にす」という結論を出す前に、欧州と日本の婚姻および夫婦財産制など夫婦間の社会的、経済的、法的関係を検討したのか。久米は単に欧州人は「欲深き人種」で、日本人は「欲少なき人種」（第89巻、五-149）だと言いたいのか。

(1) 婚 姻

1873（明治6）年7月8日、スイスの岩倉使節はジュネーブ市役所を訪れ、婚姻手続きを行う部屋を見学する。正面の大きな机の上に、当事者の署名する登録簿と民法典が用意され、机の前に椅子が置かれている。新郎新婦が双方の父母親戚などの証人に付き添われてやってくると、身分掌握者が夫婦の義務などを読み上げ、新郎新婦は机の上の法規で確認して署名する。「爾後政府より保護をうくる権を生ず」（第86巻、五-106）と久米は書く。婚姻により義務と権利が生じることを久米は認識している。

なお当時のフランス民法は、女性の再婚禁止期間を10か月としている。すなわちフランスの法律で裁かれる夫殺害事件の被告が、夫の死の直後に再婚しないからといって、夫殺害の原因が結婚外の恋愛でないとは言えない⁽⁵⁾。

ところで日本で一夫一婦制が確立するのは、これより25年後の民法施行（1898年）以降である。したがって『米欧回覧実記』の時代、日本において婚姻により生じる義務は、一夫一婦制の婚姻により生じる義務と異なる。たとえば貞操の義務は、妻の義務ではあっても必ずしも夫の義務ではない。また民法は、女性の再婚禁止期間を6か月とする。なお民法制定以前、一般に女性の再婚は強く戒められていたというべきであろう。

(2) 夫婦財産制

次にフランスと日本の夫婦財産制を確認したい。夫婦は長期にわたり物心ともに緊密な協力関係を継続するので、夫婦間の経済的關係は他人同士の経済的關係の場合とは異なる法規制が必要であると考えられる。そこで欧米では夫婦財産制に関する伝統が生まれ、多くの国がそれぞれに、その法制を受け継いだ。

フランスは、とくに結婚契約をしない場合、伝統的に後得財産共通制を法定夫婦財産制とする。すなわち婚姻締結時にあった動産、婚姻中に有償で取得した動産と不動産、婚姻中に夫婦の特有財産から生じた収益、夫婦の労働収入は夫婦の共通財産とされる。ただし共通財産は夫が管理し、夫の契約によって生じた債務の引き当てとなる。離婚や一方の死によって共通財産制が終了すると、原則として共通財産は折半され、死去した配偶者の分に相続が発生する。

明治民法は管理共通制を法定夫婦財産制とした。すなわち妻は特有財産を所有できるが婚姻締結とともに無能力者とされ、自己財産の管理・収益権は夫に委ねられた。ただし『米欧回覧実記』の久米が日本の夫婦財産制をどのように想定したかは分からない。

さてパリで 1873 年 1 月 22 日に裁かれた夫殺害事件の被告の場合、夫の死去により共通財産制が終了し、共通財産の半分が被告の所有財産となり、その管理・収益権も手に入っただろうか。これは亡夫の遺産相続とは別の、結婚により得られる権利の一部であり、日本の夫殺害事件の被告がどんなに強欲でも、絶対に獲得できない権利だ。

19 世紀から 20 世紀の中ごろ、欧米を中心に起こった第一波フェミニズムが婦人参政権獲得運動に収斂していく過程で、家庭内の男女不平等解消のための民法改正運動のほうを急務とする女性思想もあった⁽⁶⁾。「欧州にて夫を弑逆せる婦人は、其原因多くは夫の財産を貪り、之を殺してその遺金を占領し、而して後に他に嫁するの欲情より出る」と書いたとき、久米は、たぶん意図せずに、女性論の核心に接近している。女性の再婚禁止期間や夫婦財産制など日本とフランスの夫婦に関わる伝統と法制度の相違を追究していたら、「日本の姦淫より原すると、其情を異にす」という安易な結論に到達するのではなく、いまだに解決したとは言い難い日本の民法上の男女不平等問題に一石を投じたかもしれない。

3. アメリカ海軍兵学校の舞踏会から社会的男女関係を考える

1872 年 5 月 3 日（明治 5 年 3 月 27 日）、ワシントンの岩倉具視大使一行のうち約 20 名は海軍省長官ロブソン George M. Robeson 1829-97 や、国務長官フィッシュ Hamilton Fish 1808-93 など 100 名あまりの男女とともに汽車でアナポリスに向かい、海軍兵学校を訪問した。岩倉使節にとって、兵学校など軍事諸施設の視察は最重要任務のひとつだ。久米は、草木の美しい広い庭で行われた観閲式、シバーン川が注ぐチェサピーク湾頭に船舶が係留されている風景や設備の良い

4 階建ての広大な校舎など「西洋最第一とも称せらるゝ大校」アナポリス海軍兵学校を紹介する。ここで問題にしたいのは、『米欧回覧実記』の3月27日付の最後の部分：

其後校中の一館に於て、午餐の享応あり、男女数百人、みな立喫立飲の式にて、会集談話す、饌精に酒芳を極む、館狭くして男女混雜なりき、食畢り、場中の広堂に於て、男女舞踏をなす、一時有半にて轅を回し、第五時半に華盛頓に帰る（第13巻、一-247）

に関する論説、すなわち『米欧回覧実記』の「目録」が「西洋にて婦人を尊敬する風俗を論す」と題する文章である。

「西洋にて婦人を尊敬する風俗を論す」は、将来、国防を担う青年を教育する場に女性を招き入れてダンスに興ずることに対する違和感から始まる。久米は

米国の官邸に女を入るゝを禁せず、海陸の軍校にも、婦人集まり観て、操練了れば、舞踏台に至り男女相携えて舞踏をなし、歓楽を尽す、共和政治の風俗なり

と筆を起す。なおここで久米は「海陸の軍校」（下線は塩川による）と書いているが、1872年6月12日（明治5年5月6日）にニューヨーク州ウェストポイントの陸軍士官学校を訪れたさいは、校内の校長公邸で軽食を供された。宴に加わった女性もいたが「海軍校の試験のときに比すれば、男女室を分ちて混雜少なし」（下線は塩川による）という（第14巻、一-267～269）。またサンフランシスコでは大舞踏会が企画されたが、岩倉使節団で踊りが達者なのは2名のみと判明し、中止となったようだ⁽⁷⁾。

久米の違和感は兵学校の女性のせい、苦手なダンスのせい。じつはダンスが苦手な幕末維新期の日本人は珍しくない。1860年に咸臨丸で渡米した福沢諭吉は、舞踏会に行ったものの「妙な風をして男女が座敷中を飛廻はる其様子は、どうにも斯うにも唯可笑くて堪ら」ず、笑いを我慢するのに苦労したと、磊落に白状している⁽⁸⁾。またパリ万国博覧会に派遣された徳川昭武は、盛大な舞踏会があった1867年5月4日の日記に「男女数百人混乱して踏舞す、是は客を招待する丁寧の礼と云、日本にて云ふ時は田舎の大酒宴の如」とにべもない⁽⁹⁾。もっとも同じ舞踏会が同じ実をもたらすわけではない。昭武に随行した渋沢栄一によれば、フランスの舞踏会は男女の出会いの場として社会的に機能しており、その5月4日の舞踏会について「恰も本邦の北嵯峨大原岐嶺葦原等盆踊の類に似て大に異なるものなり」と記している⁽¹⁰⁾。渋沢は幕末維新期の、舞踏会に好感を示した数少ない日本人の一人だ。

さて「西洋にて婦人を尊敬する風俗を論す」の久米は、早々に兵学校のダンスを切り捨てて

東西洋は、開始より互に相通せざる、隔絶の地と覚へて、其風俗気尚、毎に相反すること、

不可思議にも委曲周到せり、我一行横浜にて、米船に上りしよりは、全く殊俗の域となり、我の挙動は、彼の矚目となりし如くに、彼の挙動も、我には怪まれたり、其詳かなるは、更僕も能く尽す所ならねと、其中に就て、最も奇怪を覚へたるは男女の交際なり

と述べ、男女交際に関する東西比較文化に狙いを定める。

(1) 夫人同伴、子女同伴

「西洋にて婦人を尊敬する風俗を論す」の検討を始める前に、1872年5月3日の海軍兵学校の舞踏会の時点で、西洋における夫人または子女の社交への参加は、すでに久米により認知されていることを確認しておきたい。

1872年2月29日(明治5年1月21日)、岩倉使節団がワシントン入りしてホテルに到着すると、グラント大統領夫人から岩倉大使に花束が届いていた。その日の『米欧回覧実記』に「西洋の盛礼なり」(第11巻、一-204)とある。1872年3月12日(明治5年2月4日)にはホワイトハウスで大統領主催の晩餐会が開かれた。久米は

凡西洋の俗、享燕には殊に敬礼を致すことにて、以て交際の大節となす、主賓必ず夫妻相携えて席に臨むを礼となす (第11巻、一-210)

と書き、饗宴が夫人同伴で開催されることを特記する。

さらに1872年3月14日(明治5年2月6日)の日本側主催のレセプションでも、来賓は「みな夫婦手を提へ、或は子女相提へ」(第11巻、一-211)で席についた、とある。久米は、夫人または子女の社交参加というアメリカ文化を理解しているように見える。

(2) 「西洋にて婦人を尊敬する風俗」

久米が「西洋にて婦人を尊敬する風俗を論す」で最初に槍玉に挙げるのは、夫が妻を尊敬する作法、いわゆる紳士道的一种だ。

夫婦交際の状は、日本にて、婦の舅姑に事へ、子の父母に事ふ所を挙げ、夫の我婦に事ふる道となせり、燭を執り、屐を捧げ、食饌を饋り、衣裳を払ひ、下るには扶け、上るには扶く、坐に榻を進め、行くには器を奉す、少しく婦の怒りにあへは、愛を起し、敬を起し、俯伏して之を詫びて、猶聴かれず、室外に、屏けられ、食することを也得さることあり

という。『米欧回覧実記』は冷静で、客観的な説明ばかりと思っていると足をすくわれる。「室外に、屏けられ、食することを也得さることあり」とはどういうことか。自宅に招かれると夫が奔走し、客の相手をするのは妻だといって不審がる体験談がある⁽¹¹⁾。ともかく久米の誘いに乗っ

て笑おう。笑っているうちに「西洋にて婦人を尊敬する風俗を論す」の標的が、じつは妻でなく女性全般であることが明らかになる。

男女舟車を同くするときは、丈夫は起て席を譲り、婦人は辞せずして其席につく、婦人座にすすみ来れば、衆みな起敬し、同会の間は、容止を慎み、声気を屏け、毎事婦人に先を譲る、婦人敢て辞せず、座を起て入れは、衆始めて情容あり、倘其儀則を移し、我の孝養の儀則にかえは、孝道の進歩を著しくみるに至るべし

以上が、西洋にて婦人を尊敬する風俗の実態だ、と久米は言いたいのだろう。妻の我儘なら、個人の問題として夫が怒るだけで良い。だが婦人を尊敬する「風俗」だから西洋の男も女も怒らず、それが紳士道だという。久米は当惑し、「孝養」を持ち出す。どう考えるべきか。

(3) 男女同権

のちに久米は、プロイセンの風俗が英米と違う例として「婦人を尊ぶ儀甚た簡なり」(第55巻三-285)と書くが⁽¹²⁾、ここではアメリカとイギリスの婦人尊敬度の高いことに注目して、その原因説明を試みる。

是大抵西洋一般の風なれとも、米英殊に甚だし、英は女王を立る国なるにより、此風を増長し、米は共和政治なるにより、男女同権の論を滋蔓せる所なり(瑞西共和国は其風甚た簡なり)、近年米国にては、婦人に参政の権あるべきことを論し、或る州にては已に公許せりとも云、華盛頓府に住す一女医は、高帽穿袴、男子の服を着て徘徊す、心ある夫人はみな擯斥す

たしかにイギリスにヴィクトリア女王がいるが、1868年まで女王イサベル2世がいたスペインはどうか。また婦人尊敬度の高いアメリカは共和政なので男女同権論が盛んだが同じ共和政のスイスの婦人尊敬度は低いというのなら、共和政と婦人尊敬度、男女同権や婦人参政権獲得運動にどんな関係があるというのか。この問題は、おそらく久米が考えていたより、複雑で難解だ。

なおアメリカ全土で婦人参政権が認められるのは第一次世界大戦後のことだが、ワイオミング準州では女性の選挙権・被選挙権が1869年に、ユタ準州では選挙権が1870年に確立したという⁽¹³⁾。久米の記述は正しい。

またワシントン在住の男装の女医とはメアリー・エドワーズ・ウォーカー Mary Edwards Walker 1832-1919 のことのような⁽¹⁴⁾。ウォーカーは南北戦争中に軍医として活躍し、ワシントンの病院に勤務した経験もある。南北戦争後は健康問題や女性の権利、衣裳改革などの問題を論じ、好んで男装したという。久米が書いているように排斥もされただろうが、名譽の勲章も授けられたことに注目したい。アメリカ女性の大胆さをアメリカ政府は認めたが、久米は認めない。

ここでスイスが唐突に出てくるのは、1873（明治6）年7月10日のレマン湖のクルーズの名残だろう。ジュネーブから関係者30-40名が乗船し、美しいモンブランを眺めながらニヨン、ローザンヌ、ヴヴェイを通り過ぎ、小さな村に上陸してホテルで会食したのち夕暮まで、庭で楽しい時間を過ごしたようだ。

瑞西の人は共和の治に長生し、一視同仁に襟懷あり、真率洒落として、心に城府を設けず、此日会食するもの、多くは府中の豪傑にて、英名を欧州に得たるもの、時に談論政治に及び、或は経済に及ふあり、興欲をきはめ、夕陽に至り、旅館を辞して山を下る（第86巻、五-107～109）

アナボリス海軍兵学校の華やかな舞踏会とは違うが、やはり豪華な社交である。西洋の婦人を尊敬する風俗は良くない、だが共和政治は悪くない、と米欧回覧の最後に久米は確信し、安堵したのではないだろうか。

しかし久米は結論を書かない。判断するのは読者だ。

之を要するに、男女の義務は、自ら別あり、国の防扞保護の責に任すへからさるも、亦明らかなり、東洋の教へ、婦人は内を治め外を務めず、男女の弁別は、自ら条理あり、識者謹思をなさゝるへからず、

アナボリスの海軍兵学校で男性とともに舞踏会を楽しむ女性から始まった「西洋にて婦人を尊敬する風俗を論ず」は、男装する女性軍医の婦人参政権獲得運動で終わる。だからといって、国防の責任をとれないから女性に参政権がない、と久米が主張するわけではない。久米は東洋の教え、すなわち宗教でなく思想としての儒教、道德と倫理の古典を用いて東洋側から東西の壁を補強し、西洋の婦人尊敬論が東洋に侵入するのを防御しようとする。

久米は、新しい西洋の男女の社会的関係を前にして当惑しているのではないか。「自由な個人」を理想とし、キリスト教の助けなしに「より良い人間」を追求する西欧の新しい世俗化の動きに目を向け、東洋西洋にこだわらずに男女の社会的関係を根本から考えなおすわけにはいかなかったのか。

《注》

- （1） 1字下げの、「例言」で「論説」と呼ばれる部分（一-14～15）にあたる。「論説」の多くは、帰国後に校閲する過程で書き加えられた。引用は、久米邦武編『米欧回覧実記（一）～（五）』岩波文庫1983により、岩波文庫版全五冊の冊数を示す漢数字と頁数を表すアラビア数字を記す。最初の算用数字の巻数は『米欧回覧実記』の巻数である。なお読みやすさに配慮し、カタカナをひらがなに、強調のための○は下線に変えた。

- (2) 岩波文庫版はランマン女学校としている。公刊以前の段階で誤写されたようである。『新日本古典文学大系明治編5 海外見聞集』岩波書店、60 頁注 13 参照。
- (3) 第2巻、一-70、ただし岩波文庫版の注の通り、内訳の男女合計は 221,042。
- (4) なお 2011 年のフランスで、パートナーに殺害された女性は 122 名である。石田久仁子、井上たか子、神尾真知子、中嶋公子編著『フランスのワーク・ライフ・バランス』バド・ウィメンズ・オフィス 151 頁参照。
- (5) 第 228 条 (2004 年に削除)。なおゾラの『テレーズ・ラカン』(1867) の主人公テレーズは、不倫相手ロランと共謀して夫カミーユを殺害したが、二人が結婚を考えるようになるのは事件後 15 か月たってからのことである。やはりゾラの『ある恋愛結婚』(1866) のヒロインは、愛人と共謀して夫を殺した後、13 か月待って結婚した。
- (6) たとえば 1840 年代に、政治活動に関わったフランスの女性作家ジョルジュ・サンド (1804-76) は、1848 年 4 月の憲法制定国民議会選挙のころ、婦人参政権獲得より民法上の男女平等すなわち夫婦間の平等の獲得を優先すべきと考えた。その信条を述べた同志宛ての、なぜか未完の書簡の草稿が残されている (ミシェル・ペロー編、持田明子訳『サンドー政治と論争』藤原書店 294~305 頁参照)。
- (7) シドニー・ブラウン著太田昭子訳『アメリカ西部の岩倉使節団』83 頁 (田中彰、高田誠二編著『米欧回覧実記の学際的研究』北海道大学図書刊行会)。
- (8) 福沢諭吉『福翁自伝』岩波文庫 113 頁。
- (9) 『渋沢栄一滞仏日記』東京大学出版会 501 頁。
- (10) 渋沢栄一『航西日記』『渋沢栄一滞仏日記』東京大学出版会 52 頁。
- (11) たとえば『福翁自伝』岩波文庫 114 頁。
- (12) 久米は、ベルリンでは女性でも「米英の人か、婦人に卑屈するを笑いて、奇俗とするに至る」(第 55 巻、三-285) とまで書く。なおプロイセン王ウィルヘルム 1 世は、普仏戦争に勝ち、1871 年 1 月、フランスのヴェルサイユ宮殿鏡の間でドイツ帝国の初代皇帝即位式を行うが、このとき女性は誰ひとり臨席しない。軍国主義的なプロイセンのジェンダーをめぐる状況を象徴する光景と言われる。姫岡とし子『教養教育とジェンダー史』(『学術の動向第 19 巻第 5 号』日本学術協力財団) 参照。
- (13) 『海外見聞集』(『新日本古典文学大系明治編 5』岩波書店) 160 頁参照。
- (14) マリー・メイヨ著齊藤恵子訳『岩倉使節の西洋研究』(大久保利謙編『岩倉使節の研究』宗高書房 1976) 326 頁参照。